

ICT 教材・機器 活用事例

学部	小学部	学年等	1年	教科	算数
授業名(単元名)	ならべよう(大中小)				
活用した場面	一斉学習		個別学習		協働学習

1. 使用した ICT 教材・機器および使用した理由・方法

①iPad+大型モニター

- (教員) 1. Keynote で授業内容を提示する。
 2. Keynote のアニメーションを使用し、クイズを出題する。
 3. 全員で鑑賞したり模倣したりするための動画を iMovie で編集する。

(児童) 発表者は、大中小に並べたイラストを ”カメラ” app で撮影する。

②iPad

(児童) 審査員は、Keynote の画面をタップして花丸の正解音を鳴らす。

2. ICT 教材・機器を活用した活動場面

活動内容	指導上の留意点	準備物
<授業前> ○「大きいのはどっち」 動画を見て答える。 <授業中> ○今日の内容 ○「かたちをさがそう」 ○「忍者になろう」 ○クイズ 「おおきいのはどっち？」	・集合するまで、算数に関する動画を流して、復習する。 座って待つ、学習しながら楽しく待つ、を促す。 ・画面で確認。 ・教室内の身近な丸三角四角の物の写真を、Keynote のアニメーション(コンフェッティ)や効果音で登場させることで、何が登場するのか期待感と注目ができるようにする。→指さしや移動して本物を探す。 ・動画を見て、体を動かすことによって、 <u>遅い速いや、左右前後上下の名前と方向が体得できやすいようにする。</u> ・イラストや数字でクイズを作り、 <u>どちらが大きい(小さい)</u> かを指さしや左右で答えるようにする。正解を赤丸と効果音で強調する。	①iPad+大型モニター ①iPad+大型モニター ・○△□の具体物 ①iPad+大型モニター ①iPad+大型モニター
ICT 協働学習 ○「ならべよう(大中小)」	・発表者は好きなイラストを選び、 <u>大中小の順にホワイトボードに並べる。</u> それを”カメラ” app で撮影し画面で共有する。発表者が「いいですか?」とみんなに尋ね、審査員役が <u>Keynote の花丸</u> (効果音付き)を押す。その他の児童は拍手をしたり、画面で正解を確認したりする。	①② ・ <u>イラスト(大中小)</u>

3. 活用の成果

◎ICT機器でイラスト・効果音・動画を使用することにより、数の世界のイメージ作りができ、わかりやすく楽しい雰囲気の授業作りができた。

- ・「かたちをさがそう」:形を登場させるときに、ドラえものの秘密道具の効果音(昔 ver.)を使用することで、この効果音の時には「出てきたものを探す」と考えるようになり、その後の授業でも利用できた。また、Keynote のアニメーション(コンフェッティ)でしだいに形が見えるように登場させることで、モニターをよく注目して、何の形かを楽しみに期待するようになった。
- ・「忍者になろう」:動画を iMovie で編集し、1回目は遅いスピード、2回目は通常スピードにすることで、動きを覚えやすくなったり、速さの違いを体感したりして楽しみながら、方向(左右前後上下)や速い遅いの学習ができた。忍者を登場させる時に、「ドドン」という効果音をつけることで、注意を向けやすくなった。
- ・「おおきいのはどっち」:クイズを提示する時、動画の歌「おおきいのはどっち♪」を Keynote に貼り付けたことで、大きい小さいのプリントをする際にも歌いながら解く児童もいて、動画のイメージが手がかりとなって理解につながった。
- ・「ならべよう(大中小)」:“カメラ” app を繰り返して学習していくことで操作の習熟につながった。
褒め言葉(「すごい」「よくできた」等)や拍手と共に授業では毎回、クイズの時に赤丸や、一つ学習が終わったときに花丸を効果音と共に教員が iPad でタップして出していた。審査員役になった児童も友だちに花丸をつける役になり、友だちの活動を見たり聞いたり、認め合うということにつながった。
- ・その他:iPad のアプリ「トドさんすう」を使用する際はあえて1人1台ではなく、1人は全員の前で行い大型 TV に映し出す、2人は机上で行う、その他の児童は、大型 TV を見て、友だちの答えの確認をする形態にした。みんなで一緒のアプリを使っている雰囲気にしていくことで、友だち(の操作)に関心を向けることや、協働学習の事前準備のねらいにもなった。
- ・算数授業全体で:発達年齢や1年生という学齢を考慮し、まずは「算数って楽しいな。」と感じてほしいと授業作りを行った。
具体物操作や、体を動かして学習することを取り入れながら、学習に向かう姿勢作りや、児童にとってわかりやすい授業を心がけて、1学期から取り組んできた。それに ICT を活用することで、より集中したり、理解したりということのをねらいながら使用している。